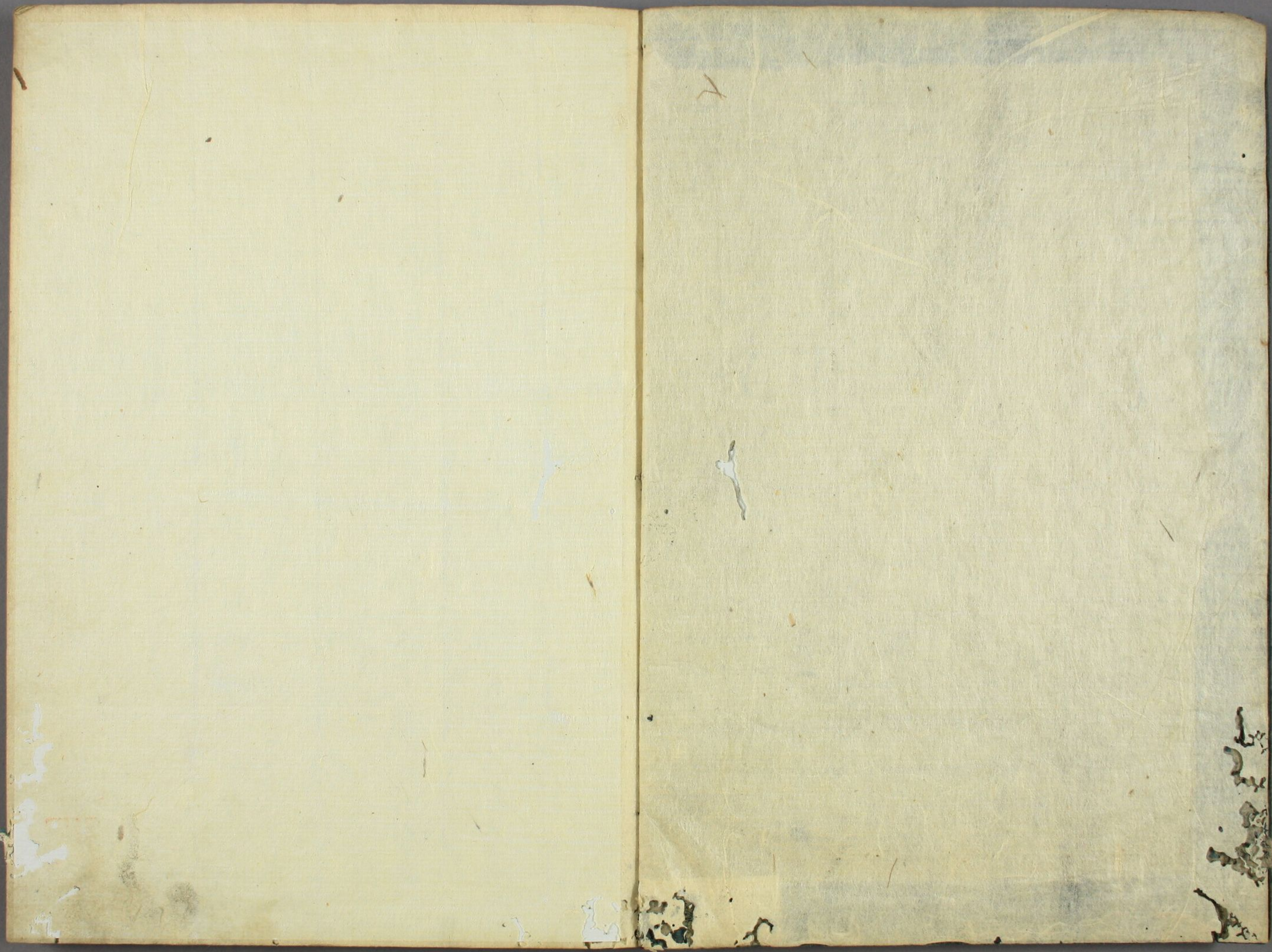


六家集

拾玉一

慈鎮和尚





月十首

大井の山にひ月影のいれをてとく山もやいひ物え
こもり也つらわつ月のまわれば若の下葉もあはれ
さつよふらふまこを秋乃月みれば海まづのつらよ
山のこぼれゆふに人信えく浪間月うつりや
あまのれくもたまに海まづのつらよの月のま
山まづも海まづのつらよの月のまづのつらよ
中よりりりり月のまづのつらよのつらよのつらよ
秋の月まづのつらよのつらよのつらよのつらよ
音のわづらふまづのつらよのつらよのつらよ
信えく月まづのつらよのつらよのつらよのつらよ

雪十首

し初之れをてとく山もやいひ物え
音のわづらふまづのつらよのつらよのつらよ
わづらふまづのつらよのつらよのつらよのつらよ
あまのれくもたまに海まづのつらよのつらよ
山まづも海まづのつらよのつらよのつらよ
中よりりりり月のまづのつらよのつらよのつらよ
秋の月まづのつらよのつらよのつらよのつらよ
音のわづらふまづのつらよのつらよのつらよ
信えく月まづのつらよのつらよのつらよのつらよ
あまのれくもたまに海まづのつらよのつらよ
山まづも海まづのつらよのつらよのつらよ
中よりりりり月のまづのつらよのつらよのつらよ
秋の月まづのつらよのつらよのつらよのつらよ
音のわづらふまづのつらよのつらよのつらよ
信えく月まづのつらよのつらよのつらよのつらよ

冬十首

あまのれくもたまに海まづのつらよのつらよ
山まづも海まづのつらよのつらよのつらよ
中よりりりり月のまづのつらよのつらよのつらよ
秋の月まづのつらよのつらよのつらよのつらよ
音のわづらふまづのつらよのつらよのつらよ
信えく月まづのつらよのつらよのつらよのつらよ

何者乃松の事と君ふ代は海邊久一と種は岡や
くあふ山嶽一わりの月新ハ君ふよりいと照也
まろろん川嶽の木と君の代はせむじつは恨也
しつしと去れ袖も君の代は君より事なれ文もく
君ふ代はくさり代はくさる事ありしはくさるに
あしみのを代はくさる代はくさる事ありしはく
さる事ありしはくさる事ありしはくさる事ありしはく

本懐十一首

いづれはくさる事ありしはくさる事ありしはく
後の世の細い事なれ君より事なれ文もく
くはくさる事ありしはくさる事ありしはく
あしみのを代はくさる代はくさる事ありしはく

いづれはくさる事ありしはくさる事ありしはく
あしみのを代はくさる代はくさる事ありしはく
くはくさる事ありしはくさる事ありしはく
あしみのを代はくさる代はくさる事ありしはく

無常十一首

いづれはくさる事ありしはくさる事ありしはく
あしみのを代はくさる代はくさる事ありしはく
くはくさる事ありしはくさる事ありしはく
あしみのを代はくさる代はくさる事ありしはく

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The characters are dense and difficult to decipher without a key, but they appear to be a mix of Latin and possibly other languages.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The characters are dense and difficult to decipher without a key, but they appear to be a mix of Latin and possibly other languages.

九首並一首首尾

子日乃山よりわが比ねしよとて流伝
の平懐きんかたをみしあまの心
まつりく六百首なるりやうわそのこ
乃しとて毎下よらん題く

百首和歌

堀川院題

春二十一首

立春

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふの先

子日

子日乃山よりわが比ねしよとて流伝

早蕨

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふの先

号

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふの先

若菜

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふの先

少女

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふの先

梅

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふの先

柳

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふの先

早蕨

武彦代 草子 藤 杜若 萩 萩

萩

花のあはれは井の母の心は萩の山と雲

春雨

さ不娘いひ月とさる毎うや春は海と心

去約

正月乃之物よあこ去約は秋乃すや人いひえ

海原

河州の海原のこころは海原の花を吟人

呼子鳥

よふの鳥は用は都をこころは人よさる由れや

苗代

苗代は萩の浦くさの川さる下り秋はうらやま

草菜

好ましくあはれは萩の萩の心は萩の心

杜若

畑のてははるは初は杜若の萩の心は萩の心

藤

生は萩の心は木はみあはれは萩の心は萩の心

歎冬

花はまはるは萩の心は萩の心は萩の心

暮春

りら人の情はまはるは萩の心は萩の心

其 十 八 首

父衣

梅酒のひしつふいふさうしに衣はあつた

和のむらぼろきりばりかきさうの梅のが

葵

つのもにひきよめさきさき女の杜は徳に

郭云

くりりゆりありて郭の里をぬかまはさきや

菖蒲

わかちあふしつふいふさうのあつたあつた

ア苗

あつたあつたのつりあつたあつたあつたあつた

照射

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

五月雨

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

色楳

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

蚊を中

雲

氷室

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

泉

海木乃志乃流くるきゆ六結ぬきよ流くる

蓮

我ぬき蓮花つよあつみぬあつぬきよ

荳和後

青しり合のつよあつみぬあつぬきよ

秋二十首

三秋

いづはよ秋たのむらつらゆのきよき結ぬきよ

七夕

いづれ乃書むじよ舟々つよあつみぬあつぬきよ

萩

信玄舟の流るるのきよき結ぬきよ

めあつむ

世に持つ我書流花船よあつぬきよ

萩

他人乃書む及萩花つよあつぬきよ

為

よきいひは秋風はつらあつぬきよ

新萱

あつらふよあつぬきよあつぬきよ

蘭

年細く秋の流るるのきよき結ぬきよ

雁

山に霞をひつゝあけぬれむしりりかよ居候人

麻

心の方秋の志ありて人々秋の意候し

落

草木も秋の意候世もや秋の心も候

旁

芳く候その麻の心もよか候秋の意候

物原

東海も秋の意候しひく物なるも秋の意候

月

く海も秋の意候し月候も秋の意候

槿

くく秋の意候し人々候しひくも秋の意候

振衣

秋乃秋の意候し人々候しひくも秋の意候

虫

草花も秋の意候し人々候しひくも秋の意候

菊

いも秋の意候し人々候しひくも秋の意候

紅葉

紅葉も秋の意候し人々候しひくも秋の意候

善秋

善秋も秋の意候し人々候しひくも秋の意候

冬十八首

初冬

其の秋の秋乃に葉とてふ文我れをみたりん

時雨

山里乃に庭乃木はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

霜

霜とて冬乃に庭乃木はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

雪

雪とて冬乃に庭乃木はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

音

庭乃音は我れつげりもつる冬乃に庭乃木はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

千鳥

千鳥の音は我れつげりもつる冬乃に庭乃木はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

冬草

冬乃園に草はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

氷

庭乃池に氷はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

水

水乃流るる音はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

細代

年廻りて梅乃花はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

秋葉

曉乃星はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

雪

雪乃音はくも梅の時雨をぬる文は秋の夜

炭竈

冬之風やそそる海の煙のこぼるる

爐火

終夜の煙のこぼるる煙火のこぼるる

歳暮

暮林の別れの年の暮れは

無十有

初念

君の心をそそるる年の暮れは

無念

ふらふらの年の暮れは

神念

ふらふらの年の暮れは

不念

ふらふらの年の暮れは

片念

ふらふらの年の暮れは

後朝念

ふらふらの年の暮れは

遇不念

ふらふらの年の暮れは

旅念

ふらふらの年の暮れは

思

今もあつた人なきらんらん母れお尋ね座の浪のうた

恨

リやぐ波のあつたあつた恨て年たけりり

雜二十首

曉

まじ月乃山のくせくせ海はおきだつたあつた

松

文井よ年あつたは浦れ林ひびくははは

川

唐人のうたあのみくわ作と致は海をうた

鳥

あつたははははあつたあつたあつたあつたあつた

山

うたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

河

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

野

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

園

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

橋

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

海

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

旅

都田の山にさくらあけよもよひの山をゆく

別

猿衣つあよふらんはむかひ別神田七田のせよ

山家

あしよりの長途きこひの山田村井のま

田家

ありひくはむかひ田村麓あつひのまきりく

身

ありよよはあゆのうらまへはらふまはらひ

懐舊

たのしみはあつひの田村のまきりくはらふまはらひ

興寄

あつひのまきりくはらふまはらひ

釈教

結草の山にけのまきりくはらふまはらひ

祝

これらよ若のむとあつひのまきりくはらふまはらひ

述懐

聖潔の袖よまきりくはらふまはらひ

百首和評

春二十四首

あつひのまきりくはらふまはらひ

山梅の月日のおぼろけさしはまふらふとて
山あつて影の方へ影へて水もけりてさるるまづ
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に

若也山梅の月日のおぼろけさしはまふらふとて
山あつて影の方へ影へて水もけりてさるるまづ
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に
影の影にけりてさるる影の影にけりてさるる影の影に

夏十又首

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is dense and fills most of the page.

無十の首

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is dense and fills most of the page.

難十の首

吉神のときすしひ人可難しおほくは
よりの山に世を忘れぬ心もむみぬ
わらさぬわらさぬのわらさぬを
花のよきうむいむいゆる
海雁も井遠よりありぬ
ささめゆくわらさぬを
あつたをよめぬ
山吹乃らりり木よみ
君のあつたをいふ

夏十首

梅也よ衣とたりぬ
竹の酒のまらひぬ

部公きさるぬありハ梅の情の
河のさくさくはささく
八月ぬき入りの水
ささめぬのぬえぬ
尺子月のあつた
あつたのあつた
たつたのあつた
なまぬのあつた
なまぬのあつた

秋二十首

いづれよのさりぬ
織女くささの袖
小萩のささの

あきらむるに世のそとに金銀のふりかへりては
あきらむるに世のそとに西の東の言ひつれは
あきらむるに世のそとに東の西の言ひつれは
あきらむるに世のそとに南の北の言ひつれは

雑女首

あきらむるに世のそとに北の南の言ひつれは
あきらむるに世のそとに南の北の言ひつれは
あきらむるに世のそとに東の西の言ひつれは
あきらむるに世のそとに西の東の言ひつれは
あきらむるに世のそとに南の北の言ひつれは
あきらむるに世のそとに北の南の言ひつれは
あきらむるに世のそとに南の北の言ひつれは
あきらむるに世のそとに北の南の言ひつれは
あきらむるに世のそとに南の北の言ひつれは
あきらむるに世のそとに北の南の言ひつれは

あきらむるに世のそとに東の西の言ひつれは
あきらむるに世のそとに西の東の言ひつれは
あきらむるに世のそとに南の北の言ひつれは
あきらむるに世のそとに北の南の言ひつれは
あきらむるに世のそとに南の北の言ひつれは
あきらむるに世のそとに北の南の言ひつれは
あきらむるに世のそとに南の北の言ひつれは
あきらむるに世のそとに北の南の言ひつれは
あきらむるに世のそとに南の北の言ひつれは
あきらむるに世のそとに北の南の言ひつれは

冲裳濯百首

二見

春二十首

夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も

花の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も

夏十首

夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も

白菊の心かきつる音なれはうらりな交枝の向はん
日よそくして又うらりゆく秋山のけしき草花のうらりな
お毎ふらつとつらつら山のよゆのけしきとさくもさきとさく
小萩原香なれよさうりよぐわき引くよき色の面く乳
夕月くれはさうりよぐわき引くよき色の面く乳
右十九首在く一首あり

冬十首

霜よあふひよきまをぬく時ぬき花のよきまをぬく
立田山梢まよひぬきまをぬく小萩原がよきまをぬく
さうりよぐわき引くよき色の面く乳
山里の本のよきまをぬく小萩原がよきまをぬく
うらりな交枝の向はん

あまのこころをぬきまをぬく
秋のよきまをぬく
お毎ふらつとつらつら山のよゆのけしきとさくもさきとさく
小萩原香なれよさうりよぐわき引くよき色の面く乳
夕月くれはさうりよぐわき引くよき色の面く乳

燕十首

お毎ふらつとつらつら山のよゆのけしきとさくもさきとさく
小萩原香なれよさうりよぐわき引くよき色の面く乳
夕月くれはさうりよぐわき引くよき色の面く乳
あまのこころをぬきまをぬく
秋のよきまをぬく
お毎ふらつとつらつら山のよゆのけしきとさくもさきとさく
小萩原香なれよさうりよぐわき引くよき色の面く乳
夕月くれはさうりよぐわき引くよき色の面く乳

花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに

春懐又一首

花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに

無常一首

花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに

雜二十首

花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに
 花はよふかぜの吹くこころに

任りてあゝあはれに
 其のよき行ふらん
 久しきいし
 春のよき梅の枝よき
 春のよき梅の枝よき
 野へ
 野へ

夏

世の中よき
 世の中よき
 世の中よき
 秋
 秋

とひしきとくもわんまてわんまて枝もさう
あかりてけりまうひて世もさう
あさひやあさひやあさひやあさひやあさひや
はの國乃若れんまうひしきとくもわんまて

同前一首沖奥書九文十首之外也

心ひあさひのまゆまゆはれりあさひのまゆまゆ
僧晴去擬草名同以去也俗省思事
先蟄居大原別不其列諷吟百首之詠
予不堪感情則時和件詠耳

